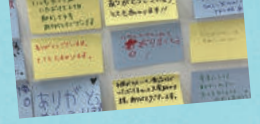


チームで取り組む

地域共生社会づくり Vol.2

民生児童委員・社会福祉法人・社会福祉協議会の
3 者連携による 4 つの実践事例集

チームで取り組む
地域共生社会づくり Vol.2
～ 民生児童委員・社会福祉法人・社会福祉協議会の 3 者連携による 4 つの実践事例集 ～

発行日　令和5年3月
発　行　社会福祉法人東京都社会福祉協議会
（地域福祉部地域福祉担当・福祉部経営支援担当・民生児童委員部）
住　所　〒162-8953　東京都新宿区神楽河岸1-1
Tel：03-3268-7186　Fax：03-3268-7222

この報告書は東京都共同募金会の配分金により作成しました。

社会福祉法人
東京都社会福祉協議会

はじめに

東京都社会福祉協議会地域福祉推進委員会では、平成30年3月に、民生児童委員・社会福祉法人・社会福祉協議会の地域福祉コーディネーター等の3者が核となり、地域の多様な主体と連携を図りながら地域共生社会づくりを進める「東京モデル」を提起しています。

本ブックレットは、令和4年3月に発行された事例集の続編となります。3者がつながり地域で実施されている4つの事例を紹介しています。取組みでの3者のつながり方や内容はさまざまで、他地域における多様な地域活動への拡がりの可能性も感じられます。

いずれの事例も、それぞれのつながり・支え合いをもとにコロナ禍における地域課題にも向き合いながら取組みが行われています。

― 地域での取組みを行う際の1つの形として、民生児童委員・社会福祉法人・社会福祉協議会の3者による連携が進み、各地域においてさまざまな実践が行われている ― そのような地域社会に向けて、本ブックレットに掲載されている事例や当人たちの思いが、今後の方向性を考えるきっかけやヒントになれば幸いです。

※昨年度の事例集はこちらからお読みいただけます。
「チームで取り組む　地域共生社会づくり～民生児童委員・社会福祉法人・社会福祉協議会の３者連携による５つの実践事例集～」　令和４年３月発行

目次

P.2　はじめに

P.4　東久留米市内での取組み
事例1　地域づくり
住民の顔が見える“住みよいまち弥生”

P.12　中央区内での取組み
事例2　つながりづくり
コロナ禍でのまごころのふれあい創出

P.20　日野市内での取組み
事例3　地域での支え合い
住民や専門職のつながりによる買い物支援

P.28　板橋区内での取組み
事例4　食を通じた交流
食と地域での温かさとやさしさ

P.36　思い　当事者のさまざまな言葉から・・・

P.38　参考　東京らしい地域共生社会づくりを「東京モデル」で進めよう！

事例1
地域づくり

「住民の顔が見える〝住みよいまち弥生〟」

東久留米市内での取組み

電話等を用いた特殊詐欺への注意を呼び掛ける音頭による踊りの一幕（音頭：警視庁田無警察署作成）

東久留米市の弥生地区は、戦後、宅地造成が始まり、古くから住んでいる人のみならず、新たに住み始めた人も多い地域です。高齢化が市内で２番目に高く、周りを隣接する小平市に囲まれた地理的特性もあります。現在、約650世帯、1,430名の方が暮らしています。この地域を舞台として、互いに協力して、無理なくできることに取り組み、顔の見える関係を広げようとする地域住民主体でのまちづくりが行われています。

もともとは、平成27年度から東久留米市社協に地域福祉コーディネーターが配置されることになり、翌年度から取組みのモデル地域として弥生地区が選定されたことから始まります。自治会会員を対象に「住みよいまちづくり」に向けたアンケート調査を実施し、その後定期的に福祉施設を会場とした住民懇談会を実施。29年度からは、実行委員会形式の交流イベントも開催されています。

令和元年度からは、住民による自主活動に向けた話し合いが始まり、コロナ禍の翌２年度には、会の目的や活動内容を定めた会則を制定、３年度からは住民による自主グループ「住みよいまち弥生」として取組みを行っています。

住みよいまち弥生代表（民生児童委員）　山口信夫さん

（新しい住民が増えたが）自治会加入率は半数程度という地域です。自治会を越えて、弥生地区としてイベントを開催できれば、地域のことを自分自身でも知ることになるし、つながりもできるのではないかと思い、取組みの当初から関わっています。

（住民による自主化しての取組みについては）社協による積極的な支援がなくなってしまうのは心細かったですが、住民が主体的に取組みを行う中でつながりを密にしていくのが一番だろうなと思っていました。福祉施設の場所を借りることができているのも大きかったです。

元民生児童委員で地域の生き字引的な存在　内田克彦さん

地域に子どもたちも増えてきたので、ぜひ巻き込みたいと子ども会にも声をかけて役員になってもらっています。お祭りもいい雰囲気で実施できています。これも地域に福祉施設があるからこそできていると感じています。

社会福祉法人園盛会 特別養護老人ホーム多摩の里 けやき園　施設長
金井島里絵さん

前任の施設長の時代から、地域住民と福祉施設との定期的な交流は持っていきたいという思いはありました。モデル地区に選ばれ、住民懇談会の場所として地域交流スペースを提供したことをきっかけに、2月に1度の定例会議や各種催し物にも一緒に参加するようになりました。コロナ前には、入居者もお祭りに参加して地域の子どもたちと交流をしていました。

コロナ禍での秋祭り再開

令和4年11月には、3年ぶりに「弥生まつり」が多摩の里けやき園の地域交流スペースで開催されました。コロナ前には行っていた飲食をなくす等、感染対策を徹底し、規模をやや縮小しての開催となりましたが、当日は60人が参加して、射的や卓上ボーリング、輪投げ、折り紙、ぶんぶんゴマ、魚つり等昔ながらの遊びを大人たちが子どもたちに教える光景が会場のあちらこちらで見られました。

コロナ禍でしたが、とにかくやってみよう、何か課題にぶつかったらその時に考えようということで、地域の全世帯にチラシを配布してイベントの告知を行いました。

当日は、以前と比べ、子どもたちの参加が多い印象でした。コロナ禍で外出の機会が減る等、外で遊ぶ機会がなかったのかもしれません。昔遊びをしながら楽しんでくれていればうれしいです。

山口さん

防災まち歩き・地図づくりの取組み

「住みよいまち弥生」では、防災についても共通課題としてとらえ、取組みを進めています。

重度心身障害の家族を抱えた地域の方が、定例会で災害時の不安を打ち明けたことをきっかけとして、災害時の地域での支え合いを考える取組みを行っています。令和3年度は、コロナ禍でもできることとして、防災まち歩き・地図づくりを実施。多摩の里けやき園から、災害時に避難所となる近隣の中学校まで実際に歩き、危険な箇所等を地図に書き込んでいきました。

高齢者率も高い地域なので、みんなで助け合い、支え合わなければいけないという認識でいます。お祭り等で顔を合わせて顔なじみになっていくと、愛情・愛着が沸き、災害時も助け合わなければという思いになっていきます。社協や福祉施設にもお世話になり、まとまりのある地域になればいいなと思っています。

内田さん

防災まち歩きを通じて作られた地図
項目番号の事項について確認し
書き込んでいます。

山口さん

まち歩きをやってみて、普段は歩ける道でも、段差や狭さから災害時には歩くのが難しいところがあると知りました。今年度は車いすを押してどのような感じになるのか、まち歩きをしながら確かめる予定です。平時から災害時の支え合いを考える取組みを行っていきます。

今後に向けて

福祉施設としても、コロナが落ち着いたら、地域住民との協働による消防訓練や、赤ちゃん世帯のお母さんが集える場の開設もできたらと考えています。民生児童委員や社協に相談し、つながりながら取組みを行っていきたいです。

金井島さん

東久留米市社協 地域福祉コーディネーター　江連大介さん

民生児童委員には、住民アンケート実施当初からさまざまな支援をいただいています。福祉施設の交流スペースを安定的に使用できるのも、民生児童委員と福祉施設のつながりがあったからです。

自治会に入っている入っていないに関係なく、地域での顔の見える関係づくりを進めるという一致した思いがあったからこそ続けてこれたのだと思います。

東久留米市内での地域づくりのモデルとして、弥生地区の取組みを各地に広げていくとともに、地域課題が出てきた際の行政への橋渡しも行っていきたいです。

山口さん

みんなで地域を支えなければという思いは、日ごろの民生児童委員の活動を通じて実感しました。地域全体で声掛けやあいさつ・助け合いのあるまちになってほしいですし、近隣地域も含むより広いエリアでの取組みにしていきたいです。

リタイヤ後の男性にも積極的に活動に参加してもらえるように、促していきたいです。

内田さん

柳自治会長　山田公徳さん

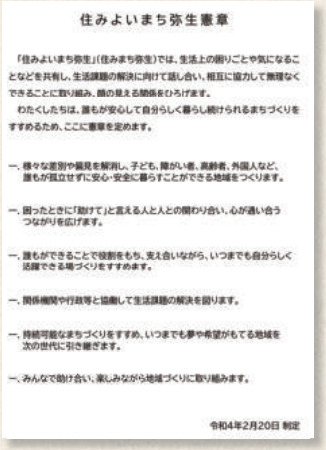
1つの自治会だけだと取組みを進めるのは難しいので、「住みよいまち弥生」での活動は助かっています。防災の取組みは大切です。

住みよいまち弥生副代表　加藤京子さん（右）
会計　沖原寧子さん（中）
書記　瀧田寿美恵さん（左）

地域の活性化を目指して活動をしています。地域のみなさんをつなげる役割をできたらと思います。

イベントを通じた交流や情報交換によって、楽しく暮らしやすい地域を目指します。

困ったときに近所の人に何でもすぐに言えるようなまちにしたいと思っています。



住みよいまち弥生憲章

「住みよいまち弥生」(住みまち弥生)では、生活上の困りごとや気になることなどを共有し、生活課題の解決に向けて話し合い、相互に協力して無理なくできることに取り組み、顔の見える関係をひろげます。

わたくしたちは、誰もが安心して自分らしく暮らし続けられるまちづくりをすすめるため、ここに憲章を定めます。

一、様々な差別や偏見を解消し、子ども、障がい者、高齢者、外国人など、誰もが孤立せずに安心・安全に暮らすことができる地域をつくります。

一、困ったときに「助けて」と言える人と人との関わり合い、心が通い合うつながりを広げます。

一、誰もができることで役割をもち、支え合いながら、いつまでも自分らしく活躍できる場づくりをすすめます。

一、関係機関や行政等と協働して生活課題の解決を図ります。

一、持続可能なまちづくりをすすめ、いつまでも夢や希望がもてる地域を次の世代に引き継ぎます。

一、みんなで助け合い、楽しみながら地域づくりに取り組みます。

令和4年2月20日 制定

「住みよいまち弥生憲章」にもとづく取組み
今後も受け継がれる必要のある共通の価値観として、「住みよいまち弥生憲章」にまとめ、継続的な取組みが行われています。

事例2 つながりづくり

「コロナ禍でのまごころのふれあい創出」

中央区内での取組み

高齢者からのプレゼントのお礼に園児がお遊戯を披露しました。

中央区では、コロナ禍でもつながりを途絶えさせず新たにつながることを目的に、「おたよりでつなぐ“まごころ”プロジェクト（以下まごころプロジェクト）」を行っています。

区内の社会福祉法人連絡会で、コロナ禍で活動が制限されている中、地域交流の機会を設けられないかという意見があがり、令和3年度から始まりました。令和4年度は、公募も含め49の保育園、高齢・障害者施設等が参加しました。

事務局の中央区社協がマッチングをし、9月の敬老の日を目安に園児から高齢者・障害者へ、12月のクリスマスシーズンに高齢者・障害者から園児へお返しのおたよりがプレゼントされます。

マッチングは、このように世代・分野を超えた組み合わせになっています。

園児がハンドベルを演奏している様子

おたよりの受け渡し時に演奏や劇を披露する等の当日のプログラムは、双方が話し合って決めています。

社会福祉法人道輝会 みちてる保育園 園長　村田美緒さん

もともと近隣の高齢者施設との交流はありましたが、コロナ禍でできなくなり、まごころプロジェクトに参加しました。12月には福祉センター※の利用者の方向けに園児からハンドベルの演奏を披露し、利用者の方からは手作りのカレンダーとクリスマスオーナメントをいただきました。

※（中央区立）福祉センター：障害のある方が地域で自立した生活を送れるよう、相談や生活介護、就労支援等の各種支援事業を行う場。

社会福祉法人東京児童協会 EDO日本橋保育園 園長　石川美智子さん

開設3年目の保育園で、これまで近隣施設とのつながりはありませんでした。まごころプロジェクトでは、高齢者施設とマッチングされ、園児手作りの金メダルをお渡ししたり、踊りを披露したりしてきました。

利用者の方々が、ずっとメダルをつけてくださっていることや、踊りを見てうれしかった・元気をもらえたというお手紙をいただき、とても良い機会になったと思っています。

園児が作成した手作り金メダル

社会福祉法人奉優会 区立特別養護老人ホーム マイホームはるみ 副施設長
岩崎くみさん

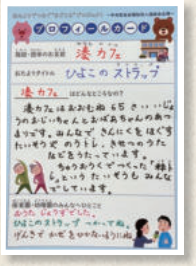
施設の近隣にある保育園・幼稚園等とは、もともと交流もありましたが、コロナ禍でストップとなりました。今回も、子どもたちと高齢の入所者との直接の交流は叶いませんでしたが、子どもたちが入所者1人ひとりに向けて書いてくれたお手紙を、いろんな想像を膨らませながら読んでいる様子が伺えました。

子どもたちが来ると、お年寄りの表情が明るくなります。「園児たちがお手紙を書いているところを見たかった」という声も出ており、早くそのような機会が訪れればいいなと思っています。

◯ 民生児童委員と社会福祉法人との取組み

令和3年度は施設同士の交流のみでしたが、令和4年度からは、さらなる地域とのつながりづくりを目的に、民生児童委員が主体的に関わっている高齢者向けサロンも、まごころプロジェクトの参加対象になりました。全部で6つの団体が参加しています。

社協がマッチングをし、サロンと保育園等がつながる機会となっています。



団体紹介のお手紙も渡します。

中央区高齢者通いの場「湊カフェ」
代表（民生児童委員） 廣澤廣（ひろし）さん

通いの場では、開催場所に自身で通える高齢者向けに健康体操や、歌、脳トレ等を行っています。平成29年6月からスタートし、今は月2回活動しています。もともと高齢者のために何かできないかという民生児童委員としての思いからスタートしたものです。

まごころプロジェクトでは、区内の保育園と交流しました。9月の時には、園児1人ひとりが作ってくれたハート形のメッセージカードをスタッフが受け取り、通いの場の参加者に渡しました。みなさんとても喜んでいました。

12月の時は、通いの場で作ったひよこのストラップを園児に配りました。お礼に、園児がお遊戯を披露してくれました。
小さな子どもたちと直接ふれあう機会はなかなかありませんが、今回、子どもたちが喜んで迎えてくれて、うれしかったです。

いきいき地域サロン「絵画を楽しむ会」代表
（元民生児童委員）　津嶋啓子さん

※令和4年11月末の任期満了をもって民生児童委員を退任

民生児童委員の活動として、一人暮らしのお年寄り訪問調査を行った際のお話をきっかけに、絵をみんなで描く会を立ち上げて丸３年が経ちました。60歳～90歳の15名ほどが気軽に自分の好きな絵を描いていて、フレイル予防にもなっています。

まごころプロジェクトでは、9月に保育園児が会いに来てくれて、メンバー1人ひとりにお手製の作品を渡してくれました。とても喜んでいて、後片付けがいつもよりも断然早くて、子どもたちとのふれあいの力に驚かされました。

12月は、メンバーが描いた絵を園児1人ひとりに渡しました。アニメキャラクターの絵も多く、子どもたちもうれしそうでした。

津嶋さん

子どもが社会の中で育っていくのは大事なので、みんなで見守っていきたいと思っています。
今回つながった園児とは、自然と交流が続いて一緒に絵を描くといったこともできるかもしれません。

その他にも、さまざまなつながりをきっかけとして、福祉施設に絵を飾らせていただきながら、ちょっとした交流を図るといったようなことも模索していきたいと思います。メンバーも絵を飾るところが増えると喜びます。

◯ まごころプロジェクトによるつながりや今後の取組みについて

廣澤さん

社協が間に入ってくれて橋渡ししてくれるのは良いことだと思います。普段の活動では、子どもとの交流は多くないので、このような機会をつくってくれたのは良かったです。多様なつながりがなかったらできなかったと思います。
せっかくなので、今回つながった保育園とは何かしらの形でつながり続けられればと考えています。

施設としても他分野の施設とつながるきっかけとなり、お互いの活動を知ることができました。高齢者と子どものつながりも、近所で出くわした際に声をかけられるような関係になればと思っています。また、子どもたちが、福祉の現場に触れたことで、自分の家族に何かあったときや進路に悩むとき等、今後の人生の岐路に立った時に思い出してくれたら有意義だなと思います。

つながりを提供するのは我々の大事な仕事なので、今回だけで終わるのではなく、つなぎ続けていかなければいけないと思っています。

岩崎さん

石川さん

今回は貴重なきっかけをつくっていただいたと思っています。今後は、お互いの施設同士が交流の機会を増やし絶やさないことが大事だと考えています。核家族が多いので、地域でできる子どもたちとおじいちゃんおばあちゃん世代との交流の機会は大切にしていきたいと思います。

民生児童委員とは、コロナ禍で行事がストップしており、関わる機会が持てていませんでした。きっかけを大事にし、何かしらつながりを模索していければと思っています。

コロナ禍ではつながりが途切れてしまったこともありました。同時につながりがどんなに大事なものだったか見直す機会にもなりました。まごころプロジェクトがあったからこそ、福祉センターともつながることができました。これを1つのきっかけとして広げていくことが大切と感じています。
子どもたちは、朝から夕方まで子どもだけで過ごす時間が長く、親以外の地域の大人との関わりも減っている状況です。

今回の交流のように、実際に行って顔を見て、雰囲気や人柄を感じ取れるようなつながりの場を大切にしていきたいです。
以前は敬老の日に園にお年寄りを呼んでふれあう場をつくっていました。そういう機会は絶やさないようにしていきたいです。

村田さん

中央区社協 管理部

社会福祉法人連絡会には施設を有していない財団や事業団等の法人も加入しています。そのような法人にもおたよりの受け渡しの同行や、報告用冊子の作成などでご協力いただきました。その他にも快く参加をご了承いただきました民生児童委員の方、素晴らしいおたよりを作ってくれた施設、園のみなさまのご協力があってこそのプロジェクトだったと思います。

本プロジェクトや他の事業を通して、街中でも自然と会話が交わせるそんな地域にしていけるよう一層取り組んでまいります。

榊原佳子さん　明石誠さん　千代倉志甫さん　佐々木由理さん

事例3
地域での支え合い

「住民や専門職のつながりによる買い物支援」

日野市内での取組み

買い物の付き添いを行う南平地区社協のみなさん

日野市南平地区では、地域住民と専門職の連携による高齢者等への買い物支援が行われています。隔週の土曜日に、地域の高齢者が社会福祉法人の送迎車でスーパーを訪れます。スーパーの中での買い物補助は、南平地区社協※のみなさんが対応。マンツーマンで利用者それぞれをサポートしながら、買い物を1時間ほどしていきます。会計が終わった後は、持ち帰り可能なダンボール箱に２週間分の買い物を詰めるお手伝いをし、福祉施設の車で利用者を自宅まで送り届けます。

※地区社協：地域の住民同士が、生活・福祉課題や困りごと等をみんなで共有し、関係機関や専門機関等と連携・協働のもと、解決に向けて、近隣で助け合える関係をつくり、「誰もが安心して住み続けられる福祉のまちづくり」を目指す住民主体の活動団体。

元民生児童委員　村田久美子さん
※令和４年11月末の任期満了をもって民生児童委員を退任

買い物への付き添いは、顔見知りがいたら利用者も安心するのではないかと、毎回参加しています。利用するみなさんに、「自分で買い物ができるのはうれしいこと」「自分だけでは重たいものを買って持ち帰れないので助かっている」と喜んでいただき、気持ちはわかるのでいつも楽しく参加させてもらっています。

地域包括支援センターすずらん 所長　相馬みゆきさん

要支援の方でも、自分の目で見て選んで買い物をしたいというニーズがあると知りました。当初から利用している人は、「3年ぶりにスーパーで買い物をしてうれしかった」と言っていました。その言葉は印象に残っています。

◯それぞれのつながりをきっかけに・・・

高齢者等への買い物支援は、南平地区を舞台としたつながりから始まります。南平地区の一部は道幅が狭くバスが通ることができず、公共交通機関の空白地域になっています。そのことにより、高齢者の外出の手段が限られており、例えば往復タクシーを利用して通院した帰りに買い物をするなど、日常生活を行う上で不便さが生じています。その地域課題を話し合うために、相馬さんは平成29年に地域ケア会議を開催し、会議に参加していた日野市社協や南平地区社協、民生児童委員にも情報が共有されます。

そのころ、日野市社協には、社会福祉法人友遊の家から、社会福祉法人に課されることになった地域貢献の取組みについて相談が寄せられていました。他県ですでに取り組まれている買い物送迎サービスについてです。日野市社協が、南平地区社協、民生児童委員、友遊の家をつなぎ、取組みの検討がされていきます。

そして、平成30年1月から、利用者の推薦は地域包括支援センターおよび民生児童委員、買い物の付き添いは南平地区社協、送迎は友遊の家という役割のもと取組みがスタートしました。

南平地区社協ぷらっと南平 会長　野澤一弘さん

相馬さんからお話があって、地区社協としても何かお手伝いをしていこうとなりました。当たり前のことをやっている認識です。困っているのであればお互いさま、おせっかいでの支え合いという思いで関わっています。

当初は、地域ケア会議や地区社協の会議にも参加している保育園の駐車場を集合場所（バス停）の1つとし、計3カ所のバス停でのスタートでしたが、ほどなくして利用者の自宅近くまで届けるスタイルになりました。

社会福祉法人友遊の家 友遊ケアセンター 理事長　神田耕治さん

社会福祉法人の制度改革があって、より一層地域とつながり貢献することが求められました。本業のデイサービスで利用している送迎車を活用すれば買い物支援もできるのではないかと思いました。法人単独では実施が難しいですが、さまざまな団体と連携できれば心強いと感じました。地域に受け皿があったので、スムーズに活動に入れました。

実際にやってみると、買い物の荷物が多く、3か所の停留場所から自宅までの移動が困難ということがわかり、自宅近くまで送迎して荷物も玄関先まで届けることになりました。

買い物の荷物を協力してダンボールに詰めていきます。

地域ケア会議でのつながりの輪から広がっていった印象です。地域包括支援センターによる要支援者への訪問時にチラシを持参して周知を行っています。

相馬さん

民生児童委員としての訪問時に送迎の周知等行ってきました。開始当初からは利用者が変わってきていますが、現在は4名が利用しています。

村田さん

日野市社協 総務係 課長補佐　濱野智之さん

地域ケア会議の中で、交通機関空白地域があり買い物に困っている方がいるという話があったこと、神田さんから他県での取組みの紹介があったこと、そして南平地区が、地区社協をはじめさまざまな活動の実施地域であることが重なり、うまくつながることができました。

買い物支援のコロナ前後

買い物支援は、普段自宅にふさぎこみがちな高齢者に外出の機会や利用者同士のコミュニケーションの機会を提供することにもつながっています。コロナ前には可能であった、スーパーの喫茶スペースでの利用者同士のちょっとした交流は、車中での会話に置き換わることになりましたが、コロナ禍でも、買い物支援は止まることなく実施されています。

利用者からも続けてほしいという声が多かったので、継続して行っています。買い物は生活上必要なことなので、利用者からは喜ばれています。

野澤さん

コロナ禍でも買い物が禁止されているわけではないので、マスクや車内除菌等感染対策を徹底して実施することになりました。車内での会話も、変わらず行われています。

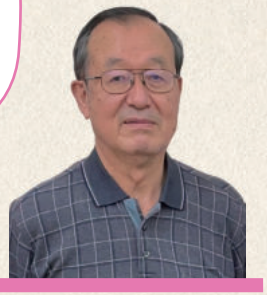
神田さん

これからの買い物支援・・・

コロナで人間同士のつながりが離されてしまっているような印象です。また、家に閉じこもりがちな人への対応等、地域でどう支えることができるのか考えていく必要があると感じています。

野澤さん

買い物支援は、利用者が自立して買い物ができるという利用条件と実際の利用者の状態にギャップがでてきている状況です。どのようにしていけばよいのかが今後の大きな課題です。



神田さん

民生児童委員だけでは、何もできなかったと思います。人と人とのつながりは大事だとつくづく感じています。民生委員は退任しましたが、引き続きみなさんと手を携えて活動をしていきたいと思います。

村田さん

チラシをもとに買い物支援サービスを周知していますが、支援が必要な方にきちんと届いているのか心配です。無料で実施しているという社会貢献の意義も今一つ浸透していない気がします。周知をより一層行っていくとともに、取組みが他の地域にも波及していけばと思っています。

相馬さん

南平は、誰かが何かを言った時に一緒に考えてくれる地域だと感じています。つながりがあり、1つの形として買い物サービスができ4年間続いています。続けることがつながりを育て地域の力となっているとも感じています。

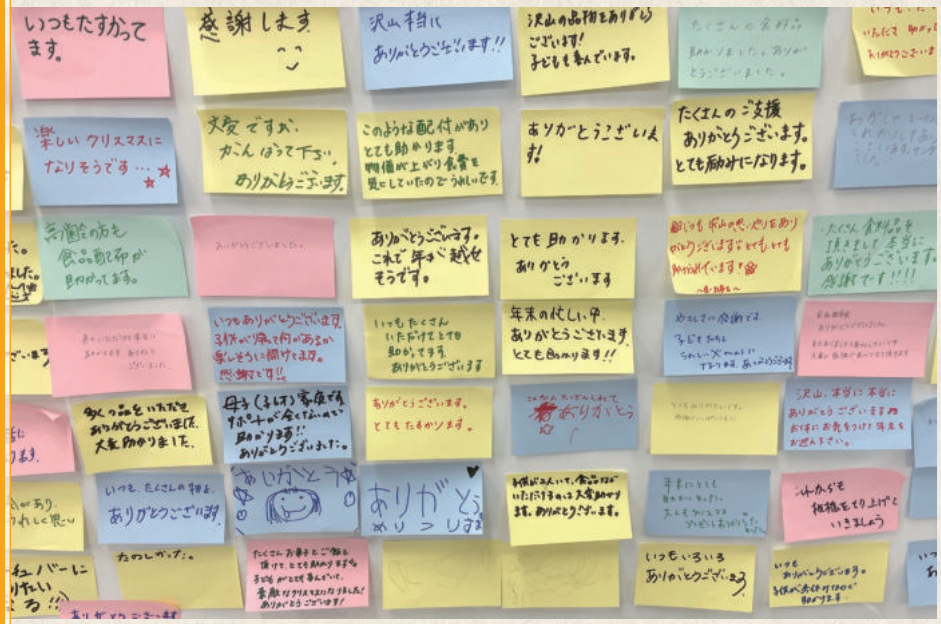
社協としても今後も一緒に考え、一緒に動いていきたいと思います。

濱野さん

事例4
食を通じた交流

「食と地域での温かさとやさしさ」

板橋区内での取組み



会場に貼られていた、参加者からの一言メッセージ

板橋区では、コロナ禍で経済的な理由により支援が必要なひとり親世帯、多子世帯等を対象に、食品配付会《「食」からつながる応援プロジェクト（以下食プロ）》を定期的に開催しています。区と社協が主催、民生児童委員協議会（以下民児協）が共催、その他、社会福祉法人施設等連絡会（以下社福連）や企業等多様な団体が協力し、食の循環で生まれる新たな支え合いのしくみとなっています。

そもそもの発端は、令和2年5月の緊急事態宣言下で、学校の休校や地域行事の中止、企業の活動休止等により、地域のためにと、活用されなくなった大量の食料品や菓子等が社協に寄せられたことから始まります。地域の子ども食堂に配布したところ、「地域で生活に困っているひとり親家庭等に配れないだろうか」という声を聞き、最初の食プロを実施。その後、民児協や社福連に協力を打診し、徐々に協力者や規模を広げながら開催し続け今日に至ります。

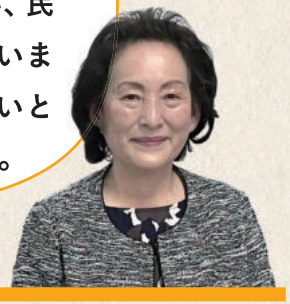
板橋区社会福祉法人施設等連絡会 代表（社会福祉法人みその福祉会 理事長）
坂本 寛さん

社福連で最初に始まったのは、子どもサポート活動です。各施設で子ども食堂やサロンを実際に開いたり、そのためのフードドライブも行っていました。コロナ禍になり活動がままならなくなっていた時に、ちょうど食プロの話があり、フードドライブにおいて連携協力することとなりました。

人手の問題等はありますが、社会福祉法人の使命として、地域に貢献することは当然という気持ちで、食材集めに協力しています。

板橋区民生児童委員協議会 会長　福司慶子さん

民生児童委員として、誰もが住み慣れた地域で安心安全に過ごしていただきたいと思いながら活動をしています。食プロが始まった当初から、民児協としても物品提供、食料品や勉強道具・玩具等の配布の手伝い、民生児童委員や子どもの居場所のＰＲ等で関わっています。会場に来ている子育て世代とのつながりは多いとは言えないので、知り合うきっかけになっています。



板橋区社協 経営企画推進課長　田口晋さん

民生児童委員には生活にお困りの方等に食プロをご案内いただき、実際に申し込みにつながっているケースも多々あります。民生児童委員が地域を回って把握されている地域の状況がとても貴重なものだと感じています。

地域でのあたたかいつながり

食プロ当日は、民生児童委員や社協、企業・団体を併せ、30 名以上のスタッフが集まり、120 世帯の申込者へ食品等を配布していきます（他 30 世帯分は区内子ども食堂を通じて配布）。会場では、単に参加者に食品を配布するだけではなく、温かい声掛けや会話等、地域でのコミュニケーションが大切にされ、ほっとできる雰囲気に包まれていました。

民生児童委員による、PR チラシ配布の一幕

民生児童委員や子どもの居場所の PR 展示

参加者からの一言メッセージの一部を紹介します。

民生委員の方に本日お会いできてよかった。子ども食堂、居場所等の情報も教えていただきました。

対応してくださるみなさまが元気で優しく、温かく迎えてくれて、幸せな気持ちになりました。

板橋区の企業・団体・ボランティアのみなさま、たくさんの支援をありがとうございました。

板橋区社協 経営企画推進課 地域福祉推進係長　関根真紀子さん

食プロに来られる方は、仕事等で忙しくされていて、なかなか地域との接点を持つことは難しいのかもしれません。そのような中、会場で、民生児童委員や企業の方等から声掛けをしてもらい会話をすることが、地域と接する1つの機会になりえます。

「食品をもらえるのも、もちろんうれしいことですが、声をかけてもらえたり、優しく接してくれるのが一番うれしいですし、民生児童委員を知ることができて良かったです」というようなことが毎回必ずアンケートに書かれています。

板橋区社協 経営企画推進課 経営企画係長　一島寿樹さん

食プロは、ただ食材をもらえるということだけではなく、地域での温かさ・やさしさを感じることのできる場なのだと思います。また、地域に民生児童委員という相談を寄せることのできる存在がいることを知る機会にもなります。それらが、食プロを開催する意義の1つなのだと思います。

連携・つながりと今後に向けて

民生児童委員や社協をはじめとする多様な連携による食プロの取組みはありがたい限りです。自分たち社会福祉法人だけではここまでの展開は難しいので、プロジェクトの一員として関われることに感謝しています。社会福祉法人の使命として地域における公益的な取組みに対するマインドを持ち、積極的に行っていくことは大切ですが、地域でのサポーターのような方に幅広く参画いただき、誰もが負担のない形で実施できる体制構築も必要なのかもしれません。

それに向けて、「自分が寄附した食材がこのような過程や連携・つながりを経て、このように届けられた」ということが実感できるように可視化をしていくことが大切だと感じています。継続した取組みや、多様な団体との連携・つながりづくりへのモチベーションやエネルギーになると思います。

坂本さん

ご協力いただきました企業・団体

物資略 あいうえお順

	団体名	内容
1	あいおいニッセイ同和損害保険株式会社	フードドライブ食品
2	秋田県大潟村吉田農場	お米
3	株式会社　池田砂糖製作所	フードドライブ食品
4	NPO 法人　いたばし子育て支援・フラワー	お菓子
5	NTT 東日本　東京北支店	アルファ化米・乾パン
6	菊池食品工業株式会社	麩菓
7	株式会社　正栄デリシィ	チョコレート菓子
8	生活協同組合　コープみらい	お米
9	第一生命保険株式会社　池袋総合支社	お米・焼き菓子
10	高島平商技等組合	カップ焼きそば・カップ麺
11	株式会社　TOK	缶ジュース・コーヒー等
12	中野製薬株式会社	かりんとう
13	日本製粉協同組合連合会	あんこ
14	株式会社　日向薬	お菓子
15	マルハシ大山店	お菓子
16	リンテック株式会社	ケンタッキーフライドチキン プリペイドカード
17	社会福祉法人　あすなろ福祉会　あいあい保育園	フードドライブ食品
18	社会福祉法人　大泉福祉学園　板橋区立徳丸福祉園	
19	社会福祉法人　高齢者研究所 高齢者地域福祉会　小茂根福祉園	
20	社会福祉法人　義塾　板橋区立赤塚福祉園	
21	社会福祉法人　小茂根の郷　東京武蔵野ホーム	
22	社会福祉法人　白鳩福祉会　星美保育園	
23	社会福祉法人　日鳩福祉会　つつじ保育園	
24	社会福祉法人　日本キリスト教奉仕団　東京都福祉工場	
25	社会福祉法人　ハッピーネット　中央の園若草	
26	社会福祉法人　自閉症協会　自閉保育園	
27	社会福祉法人　みその福祉会　ケアタウン成増	
28	社会福祉法人　有隣社福祉会　風の子保育園	
29	熊野地区民生委員・児童委員協議会	ご寄付
30	桜川地区民生委員・児童委員協議会	スパゲッティ
31	仲町地区民生委員・児童委員協議会	お菓子

住民からの相談を受けて、住民が自分の力で日常生活を送れるように、地域の居場所や人、情報、制度等さまざまなサービスにつないでいますが、専門機関とのネットワークがとても大切だと感じています。

このような食プロの活動を通して、同じ方向に向かって連携・協働ができたり、会場にお越しのみなさんの笑顔に出会えるのはうれしいことです。民生児童委員活動の励みにもなります。引き続き取組みに関わり進めていければと思います。

福司さん

それぞれの団体の取組みが食プロでつながり化学反応を起こし、新たな活動が生まれてきています。
こうしたさまざまな活動に展開していく中で方向性を見失わないためにも、民生児童委員、社福連、社協がその中心であることが三者連携の肝（キモ）だと思っています。

板橋区社協

当事者のさまざまな言葉から・・・

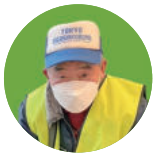
東久留米市

お祭り等で顔を合わせて顔なじみになっていくと、愛情・愛着が沸き、災害時も助け合わなければという思いになっていく

イベントを開催できれば、地域のことを自分自身でも知ることになるし、つながりもできる

住民が主体的に取組みを行う中でつながりを密にしていくのが一番

地域全体で声掛けやあいさつ・助け合いのあるまちになってほしい



板橋区

食プロは、ただ食材をもらえるということだけではなく、地域での温かさ・やさしさを感じることのできる場

同じ方向に向かって連携・協働ができたり、会場にお越しのみなさんの笑顔に出会えるのはうれしいこと

取組みの可視化が、多様な団体との連携へのエネルギーになる

食プロでつながり化学反応を起こし、新たな活動が生まれてきている

日野市

人と人とのつながりは大事

さまざまな団体と連携できれば心強い

当たり前のことをやっている認識。困っているのであればお互いさま、おせっかいでの支え合い

続けることがつながりを育て地域の力となっている

中央区

多様なつながりがなかったらできなかった

お互いの施設同士が交流の機会を増やし絶やさないことが大事

コロナ禍ではつながりが途切れてしまったこともあったが、同時につながりがどんなに大事なものだったか見直す機会にもなった

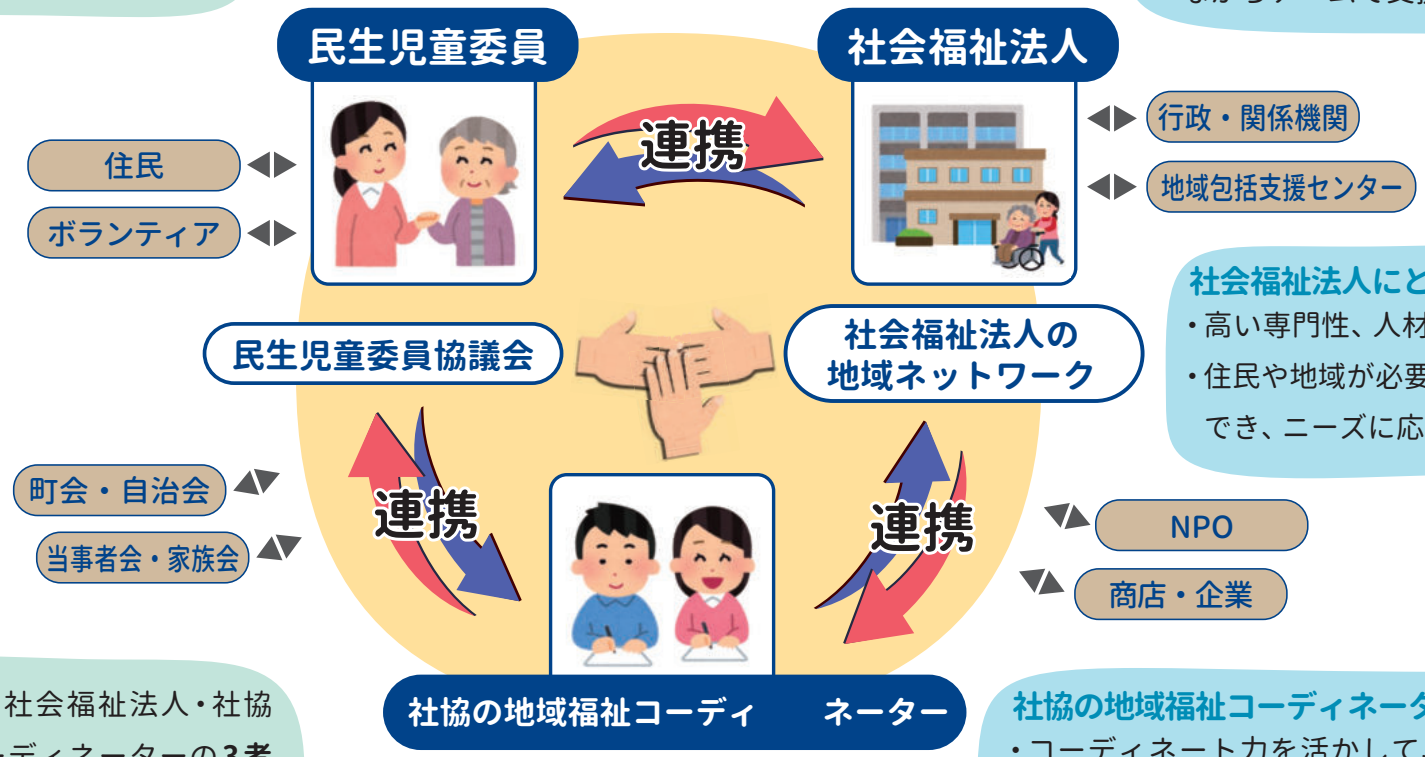
街中でも自然と会話が交わせるそんな地域にしていきたい

東京らしい地域共生社会づくりを「東京モデル」で進めよう！

それぞれの**強み**をいかして連携することで**抱え込まずに**これまで**気になってもできなかった支援**や**活動ができる**可能性が拡がります。

東京モデル

チーム方式の地域福祉推進体制



民生児童委員・社会福祉法人・社協の地域福祉コーディネーターの**3者が核**となり**地域の多様な主体と連携**を図ります。

連携する意義

民生児童委員にとって

- 住民との信頼関係、自治会・町会との協力関係という強みを活かせる。
- ひとりで抱え込まずに、専門職の関わりも得ながらチームで支援できる。

社会福祉法人にとって

- 高い専門性、人材・資源・設備を活かせる。
- 住民や地域が必要としていることを知ることができ、ニーズに応じた取組みができる。

社協の地域福祉コーディネーターにとって

- コーディネート力を活かして、つながりをつくり、個別支援、地域支援、しくみづくりを推進。
- 住民が気づいたニーズや社会資源を知り、つなげることができ、地域で共に活動しやすくなる。